

---

S ・ P

+ 悠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

S・P

### 【Nコード】

N4312M

### 【作者名】

十悠

### 【あらすじ】

S・P、それは超能力者のみ入れる特殊部隊『スキル・ポリス』その第一斑班長 島崎瞳とガサツな不良少年 早川 涼太のアクションあり笑いありの愉快な物語である。

貴方はこの物語についてこられるか。



マンガで見たようなセリフを言って命乞いをしている

「そーゆーことにわいきません、上からの命令であなただけの存在を消しに来ました」

そう冷たく言い放った女は国家特殊警察部隊『S・P』第1班長

しまさき ひろみ  
島崎 瞳

ミディアムヘアの冷たそうな女だ、そしてその女は犯人の近ずき頭に手をあてて

「バイバイ」そういうとさっきとおなじ電気のようなものをだしてその犯人を

『消した』

女は「それでは」そういうのこして歩き出した

俺はハッとした「まてよ！」

ピタッ 女が止まった

「なんですか？」少し顔をこちらに向けて言う

「お前今のなんだよ！なんであいつ消えたんだよ！」

「クスッ」 むかつく、、、「おい！このこと誰かに言ってもいいのかよ！

だめなんだろ？

ならなんでだよ！」

あいつはそのまま言った

「学校の校舎に落書きをしたり、教師にはむかう『問題児』の言う

ことを誰が信じるんですか？」

！？なんでコイツ、、、

「なんでって顔してますね当たり前ですよ、私はS・Pですよ？」

そういうとあいつはこっちを向いて笑顔で言った

『知りたいのなら、自分で探せばいいじゃないですか』

「?？」

## 〈最強班長〉

S・P

### 第1話〈最強班長〉

昨日あった出来事を思い出しながら俺は一人、部屋でごろごろしていた。

今思っても夢みたいだ、島崎瞳、人を消した後に笑顔……怖え；

ピンホーン♪

なんてことを考えてたらめったにこない客が来た  
どーせまた訪問販売だろ、と思い俺は居留守する

ピンポーン♪ピンポーン♪ピンポピンポ、ピポピポピポピポ  
ピポ

「あーもーうるせ!!!! 誰だ人の家のインターホン押しまくつてんのは!!」

ガチャ、、、

俺は一瞬何が何だかわかんなくなった俺の目の前には

『S・P』と書かれた腕章をつけた男女問わない大量の人、、

「;;」

「なんだ；おまえら；」

失礼しますと一人の女がいうと

ゴツツという鈍い音とともに俺の意識が闇へときえた

目を覚ますと俺は家のソファに寝ていたそして隣には女が、、、、

女!?

ちょっと待て現状を把握させてくれ、  
えっと俺の隣にはショートヘアの女が寝ていて、その周りのは男女  
問わずいっぱいいる

まあとりあえず「どけ!」「ぐっ」俺が蹴ると起きずに転がった

「あ、おはようございます」眼鏡の女が言う

何なんだこいつら;;;

「お前ら、何なんだよいきなり人の部屋押し掛けて;」

俺が問うと眼鏡が「あなたを連れて来いと班長に言われまして」

「ん? あ、そうか、、じゃねえ!!」「?」眼鏡は目を見開く

「なら何で俺が気絶している間に連れていかねえんだよ」

いや別に連れて行かなくてよかったんだけど、、気になるんだよ、  
するとそれまで寝ていたショートヘアの女が口を開く。

「はんちよにー手荒なまねはするなって言われた☆でもー殴っちゃ  
ったからー気がついてから何もなかったかのように戻ればいいや!  
っておもった」

続けて眼鏡が言う「すみませんね、いつもの癖で、」

いつも何してんだよ;

奥の男が満面の笑みでこう言った

「つーことで一緒に来て」

は？

「よーしいこーレッツゴー」

はああああああアア！！؟؟？

な、なんなんだよこいつら、何なんだよこの超高層建物そして一番の疑問

何で俺はここにいるんだーーーーー！

『班長！第一部隊ただいま戻りました』

眼鏡がインターホンに向かって言う、すると向こうからは。

『ご苦勞様です！班長はただいま就寝中でございます！』

『そう、では門を開けて』

『はい！開門いたします！』

ウィーン

何とも最先端技術のような音を立てて門があいた、奥に兵隊らしき人が立っている

そいつの腕章はS・P10と書いてある。

ランクが下なのか眼鏡にペコペコ頭を下げている、馬場馬鹿しい俺はこの世で上下関係が1番嫌いだ。

そのせいで認められない技術や才能がある…  
自分の地位を利用して好き勝手する奴らも……大嫌いだ！

「それじゃあ行きましょう、班長がお待ちです」

お待ちって今就寝中って言ってたじゃねーか；；  
それから中に入って、エレベーターに乗って15階に上がった  
高けえーあいつこんなとこ住んでんのか；；

「班長の部屋は此処です」

『一番』と書かれた部屋に入る

「班長！連れてきましたよ」

すると長身で短髪、真面目そうな男が奥のドアを開けて出てきた。  
まてよ、班長は女だよな、こいつ誰？  
そんな疑問をよそに男は淡々と口を開く。

「班長は就寝中って伝えたはずだけど？」

「お前の言葉なんて頼りになるかボケ」

おいおい；いまこの眼鏡ボケつつたよな；  
国家直属機関の隊員がボケつつたぞ；

「班長は、そこか。」

そうつぶやいてドアを開けようとする。



「だーかーらー、、就寝中だから？」

伸ばした語尾に似合わぬ早足で眼鏡の前へ回り込み  
開きかけたドアを片手で強く押して閉じた。

その時の顔は何か裏を持った威圧的で探るような目で、少し、  
少しだけびびった。

「では班長が起きられたら客が来ていると伝えろ。」

さすがの眼鏡も引き下がった。

「はーい。伝えまーす。」

男は満足したように笑って手をフラフラと振った。

「では隣の客間にいてください、お茶を持ってきます。」

「へーい」

だれがこんなとこにいるかボケ！

悪いがこんなとこに長居する気はないんだよ！

そんなことを思っていたら眼鏡がお茶を持ってきた。

「失礼します。」

……出てった、、、、、、よし！

帰るか！

てかここどうやって帰る？

四方向全部にドアがある。

こういうときは……感だ!!  
南側のドアを開けた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4312m/>

---

S・P

2011年10月7日01時28分発行